

鳥取県労福協 2011年度第1回全県研修会

講演 「災害に備える地域の力を育むために」

講師：日野ボランティア・ネットワーク事務局

山下弘彦さん

研修テーマ

東日本大震災から約四ヶ月が経過しましたが、今なお続く不自由な避難生活とともに、「日常」を取り戻すために、復興に向けた取り組みが進められつつあります。被災地に対する継続的な支援とともに、改めて日本社会全体が、『災害と社会』というものに向き合い、これからのために何が本当に必要なのかを考査します。

講師ご紹介

鹿児島県出身。2000年の鳥取県西部地震を旅行中に体験。その後、ボランティアが不足していることを知り、日野町で初めての被災地ボランティア活動に参加。豊富な経験を生かし、東日本大震災被災地でも支援活動を展開中。「鳥取県西部地震展示交流センター」を拠点とし活動している。



■ とき

2011年7月23日(土)

13時30分～15時30分

■ ところ

倉吉市山根

「倉吉シティホテル」2階会議室
(駐車場は準備していますが、なるべく公共交通機関をご利用ください。)

■ 入場

無料

(問い合わせ先)

鳥取県労福協事務局

鳥取市天神町 30-5

電話 0857-27-4188



日野ボランティア・ネットワーク
(ひのぼらねっと) 事務局

山下 弘彦さん



この人に 聞け

テーマ

「大震災、復興への課題と支援」

大地震と津波で、史上例がないほどの大惨事となった東日本大震災。国を挙げて復旧・復興への取り組みが続いているが、発生から3カ月が過ぎても見通しが立っていない。宮城県災害ボランティアセンター(仙台市)を拠点に、被災地で支援活動を行っている日野ボランティア・ネットワーク(ひのぼらねっと)事務局の山下弘彦さん(45)

に現地での課題や被災者のために私たちに何ができるのか聞いた。

共に汗を流す

ひのぼらねっとは、鳥取県西部地震(2000年10月)から約半年後の01年4月に設立された。現在、会員は約40人。震災を契機に育ったボランティア精神を

を地震に襲われた。具体的な課題としては、他人に迷惑を掛けられないとの意識が強く、支え合いが気軽にしにくかった▽高齢者が多くて暮らしの復旧に時間がかかる▽高齢者世代にとって震災前から日常生活が大変だった▽高齢化などで地域を支える力が弱かったーなどだ。

悪化するなどしたが、住民の間から「自分たちも何かをしよう」という意識が芽生えてきた。これは震災以降、町を元気にしようと町民が力を合わせて取り組んできた成果の一つだと思ふ。だが、過疎と高齢化という「逆風」はますます強くなっている。これをどう止めるかを意識した取り組み

陸部の被害や現状があまり知られていない。がれきの片付けも進んでいるところがある一方で、なかなか手がつけられないところもある。震災で壊滅した町をどう復旧していくかは、地元の人たちが主体的に考えることが一番大切だ。私たちボランティアなど支援者は、地元の人たちが考える環境をつくるため手助けをしていきたい。

自分のできることを行動に

町に根付かせ、住みよい町づくりに生かすのが大きな目的で、町内にボランティアの輪を広げることや町外のボランティアとのつながりを継続することを意識して、毎月70歳以上の高齢者世帯を訪問するなどの活動を続けている。

このため、復旧するためには元に戻すだけではだめで、町をどう元気にするかという視点で取り組んできた。当初、外部からのアドバイスはありがたかったが、何よりも必要なのは一緒に汗を流してくれる人だった。

みと、これまで続けてきている活動を並行、継続していくことが必要だ。被災地に目を向けて

鳥取県は11年前に被災の経験がある。県民には、被災地で今、何が起きているか目を向け続けてほしい。被災経験があることで、被災者の苦しみなども分かるはず。長くかかる復興の道に寄り添い、自分のできることを考え、行動してほしい。

日野町は、過疎や高齢化で地域のコミュニティにほころびが出ていたところ

住民に参画意識
震災の影響で町の財政が

東日本大震災の大きな特徴は「被害や復旧へのスピードが同じではない」ということ。県や市町村、地域、被災者一人一人、それぞれ連っている。たとえば、津波の被害が大き過ぎて、内

(聞き手は西部本社編集委員・景山誠)

オピニオン